

図書館の徹底活用術⑩

学習主体形成と学力形成との関連に関する考察
梶田叡一の学力モデルとその構造になぞらえて

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に、図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介しています。今回は、日本の戦後に於ける学力論に大きな影響を与えた広岡亮蔵の学力モデルになぞらえて、教育課題としての学力観のモデルを、「高い科学的な学力を、しかも生きた発展的な学力」という形態で具現化すると共に、「知識層」(外層と中層に分化)と「態度層」の二層で学力を構造化して捉え、知識層を支えるものとして態度層を位置付ける学力モデルを提起しています。

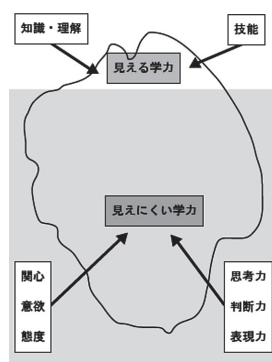
この広岡亮蔵の学力モデルは、学習者を取り巻く環境との関係性の中から態度や知識が生成するとした点にその特徴があり、この学力観の中核には「感受表現態度」とそれを支える「操作的な態度」、及び、「思考態度」があります。これらが二層化された内の「態度層」を構成することがその特徴であり、経験や内面的な学習ニーズの存在を前提としているといえます。これと関連する形態で「態度層」の外側に技術と知識などによって構成される「知識層」が指定されています。そしてこの構造は、学習者のみならず、多くの教師が持っている内面的な問題意識に応え、伝達可能な知識やスキルのみならず傾注しない学力観を提示することになります。

上記のような学力論モデルのこういった流れを踏まえて、今回は現代的な主体形成と学力、及び、それらを基にした図書館利用に関して考察を深めて行きたいと思えます。

これを考える糸口として、先の広岡亮蔵と同様に学力モデルを提唱したものに、梶田叡一が提唱した「氷山の一角モデル」があります。

臨時教育審議会答申を背景に、日本教育界に於ける学力観を巡る議論の中、文部省が1993年に提示した『小学校教育課程一般指導資料：新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』に於いて、情報化社会、国際化社会への対応をモチーフとする「新しい学力観」が提唱される中で、社会がどのように変化しても自らが主体的に対

応していけるような、「自己教育力の育成」を基軸としながら、評価の観点に於いて、「関心・意欲・態度」を最上位に位置付け、他方で「知識・理解」を軽視する学力構造を提示することで教育全体のパラダイム転換を図ろうとしました。



梶田叡一「教育における評価の理論」
学力観・評価観の転換 金子書房、1994、
pp.73-74、p.86、を基に作成した。

上記のような学力観を巡る議論に対して、梶田叡一は、学力を氷に浮かんでいる氷山に喩え、水面の上に表出している部分を「見える学力」(例えば、「知識・理解」「技能」とし、水面下の隠れた部分を「見えにくい学力」(「例えば、思考力・判断力・表現力」「関心・意欲・態度」として学力に於ける「氷山の一角モデル」を強調しています。

この水面に浮かぶ氷山の喩えによって、僅かに水面から「見える学力」を「見えにくい学力」が、その水面下で膨大な質量として支えているということを図のような構造で提示されているのがわかるでしょう。このことは、「知識・理解」や「技能」といった客観的に可視化して測定できる部分の学力と、「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力・表現力」といった単純には測定不可能な内面的な要素を含む学力観を念頭にしていることを示唆しています。

同時に、このことは前回に見た、「感受表現態度」や「思考態度」といった内面的な問題を学力の中核に据えた広岡亮蔵などが示した学力モデルと、客観的には可視化できない部分に焦点を当てているという意味に於いて同一の認識に立脚しているといえます。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)